



Title	『諳厄利亜興学小筌』小考：「類語大凡」を中心として
Author(s)	伊藤, 朱
Citation	大阪大学言語文化学. 2005, 14, p. 185-195
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77914
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『諳厄利亜興学小笈』小考
—「類語大凡」を中心として—*

伊藤 朱**

キーワード：諳厄利亜興学小笈、本木正栄、類書

Scholars of the history of lexicology in Japan argue over the identity of the first English-Japanese dictionary: *A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language* (Japanese title: *Eiwa-Taiyaku-Shuchin-Jisho* 『英和对訳袖珍辞書』) or *Angeria-Gorin-Taisei* (『諳厄利亜語林大成』), written three years after *Angeria-Kougaku-Shousen* (『諳厄利亜興学小笈』) (1811) was completed. This note mainly studies the characteristics of vocabulary arrangement in the Japanese translation in *Angeria-Kougaku-Shousen*, aiming to clarify the book's position within the history of English-Japanese dictionaries.

The book's history began in 1808. Though closed-off from the world, the Edo government in Japan was forced into contact with Englishmen after an incident in which a visiting English ship, HMS Phaeton, demanded food and fuel. The incident was viewed as constituting a severe threat to the Edo government from the European nations. Thus, in 1809, the Edo government secretly ordered a Dutch-Japanese translator, Motoki Shouei (本木正栄), to write a study-book of the English language. The book never appeared in public. Therefore the word *Angeria*, which seems a translation of the Latin word "Anglia" into Chinese, appeared in the book's title but was not known to most people even in the 1860s.

The first three volumes of the book are subtitled "Ruigo-Taihan (『類語大凡』)". In these sections, English vocabulary items are arranged under categories by subject. They are presented with Dutch-like pronunciation and Japanese translations. This note analyzes the divisions—Heaven, the Earth and People—within the volumes.

Volume 1 includes the sections on Heaven and on the Earth. In the section about Heaven, six sub-categories are found: heaven, directions, the sky, the sun, the moon and colors. In the section about the Earth, twenty sub-categories appear, such as:

* A View of "Ruigo-Taihan" in *Angeria-Kougaku-Shousen*: Its Relation to Lei Shu (ITO Akashi)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

mountains, mineral substances, numbers and seasons. Volumes 2 and 3 deal with people and their surrounding environment, such as: creatures, tools, clothes and food. They also deal with human feelings.

The arrangement of items of vocabulary in “Ruigo-Taihan” is influenced by a Chinese-oriented view of the whole world; having three main areas (Heaven, the Earth and People) and related sub-categories aims to express the world in its entirety. Reference books on this world-view, called *Lei Shu* (礼書), already existed in the Tang dynasty and were later imported into Japan.

In this fashion, Motoki expressed the English-language world in a way most familiar to himself and his contemporary intellectuals. In other words, “Ruigo-Taihan” expresses Motoki’s view of the world through the English language.

1 はじめに

南出康世の『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選 第3章 辞書』によれば、我が国において英語を紹介する役割を果たした英和辞書の原点を、『諸厄利亜語林大成』（文化11年・西暦1814年）と見るか『英和对訳袖珍辞書』（文久2年・西暦1862年）と見るかは意見が分かれるが、現代の一般的な英和辞書の形式に、より近いものは『英和对訳袖珍辞書』であるとしている。私は修士論文「外国辞書の訳出における異文化接触—『英和对訳袖珍辞書』を通して—」において、この南出の意見を基礎にして『英和对訳袖珍辞書』を日本における最初の英和辞書として、その訳語の形式を中心に、同書がどのように日本人に英語の世界を紹介したのかということを中心にして検討した。

本稿においては、いま一つの、我が国における英和辞書の原点と目されている『諸厄利亜語林大成』を検討する前段階として、同書より3年前に作られた『諸厄利亜興学小筈』（「筈」は手引きの意）について検討したいと考えている。というのも、前出の南出によって紹介されている渡辺実『英語習学の方法と論理—「諸厄利亜語林大成」の誕生まで』によると、『諸厄利亜語林大成』と『諸厄利亜興学小筈』には共通の底本、おそらくは英蘭対訳語学入門的なもの、があり、『諸厄利亜興学小筈』で訳し残したものを『諸厄利亜語林大成』で訳出したと論じられているからである。

本稿は、『諸厄利亜興学小筈』（大阪女子大学蔵）にかぎり、その全体構成における訳語の位置付け（特に単語）を検討し、次の機会に『諸厄利亜語林大成』について検討したいと考えている。

2 『諸厄利亜興学小筈』成立の背景

前引南出論考(128頁)には、『諸厄利亜興学小筈』が徳川幕府からの命令により、成立した過程が述べられている。それによると、1808年のフェートン号事件で徳川幕府は英語によるコミュニケーションの欠如が今後の国防上重要な支障を引き起こしかねないことを痛感したため、幕府は翌年に本木正栄らの和蘭通詞に英語学習を命じた。通詞らはオランダ商館員プロムホフから英語の手ほどきを受け、2年後に本書が完成したのである。

『諸厄利亜興学小筈』の構成は、文化8年に記された、長崎和蘭通詞である本木正栄による3葉にわたる序文、篇目(目次)、本文、2葉の後跋の順となっている。その序文には、『諸厄利亜興学小筈』成立が、本木家伝来の書物を底本にしていることが述べられている。

命を奉じて、其難きを難とし、自から限り廃するときは、国家の裨益にならざる事を憫へ、日夜、尋思専精するの余り、家学伝来の古書を披覧しつるに、五十年前、先人勤学の頃ひ写蔵せし数本を得たり。此書、和蘭の学語を集成しける書にて、一傍に和蘭語、一傍に諸厄利亜語と、両側に細写したるものなり。

(2葉裏・句読点ならびに濁点は筆者が施した。)

このように、『諸厄利亜興学小筈』は、本木家に伝わる書き写された何冊かの古書を通じての学習の成果である。

つらつら量察するに、昔年、齋来(もたりきた)りし奇書にして、蘭人これを授けず。其頃、素より諸厄利亜に通じたる人なけれども、蘭語習学の次に、鏤(ろう)版のままに伝写して、原本は蘭人に返したるものなるべし。

(3葉表・句読点ならびに濁点は筆者が施した。)

引用にあるように、書き写された本はオランダ人に返却されたため、どの本が参考にされたのかは不明であるが、南出は岩崎克己「徳川時代における英語辞書の舶載」によりながら、Sewel, W. Korto wegwyzer tot de Engelsche taal. Amsterdam, J. Wessing Wz. 1760. 12°という底本の推測を紹介している。

南出は、上記のこの本の構成から見て、『諸厄利亜興学小筈』ならびに『諸厄利亜語林大成』との共通の底本であろうと推測している。しかし、上記引用序文では、本木自身が「数本」と記しているので、底本以外、参照したものがあったことは確実である。底

本一部のみに限定できないであろう。

3 「諸厄利亜」語と「英」語

Anglia という語に相当する「諸厄利亜」(アンゲリア)は、『諸厄利亜興学小筈』ならびに『諸厄利亜語林大成』の中に見られるだけで、その後の文献には、見当たらない。この語は、Anglia を中国において音訳した語と思われる。井田好治「長崎本『諸厄利亜興学小筈』の考察」は新井白石の『西洋紀聞』(正徳5年・西暦1715年)「アンゲルア、アンゲリヤともいふ。イタリヤの語には、エンゲルタイラといひ、ヲヲランド人〔和蘭人〕は、インゲラントといふ。漢には、…諸厄利亜(アヌニイリヤア)とも訳す。むかし、我国にて、インガラテイラとも、またゲレホロタンともいひ、俗にはイギリスといひしは、すなはちこれなり。(岩波文庫)」(校訂者：村岡典嗣、1936、41頁。原文は「アンゲルア、」の割注である。)という資料を発掘している。

以下に示すように、早川勇『日本英語辞書年表』によれば、『諸厄利亜語林大成』以後の江戸時代に日本国内において刊行された、オランダ語ならびに英語関連の主な辞書には「諸厄利亜」は使われていない。

西暦	和暦	辞書名	編纂者名	出版地・出版社など
1814	文化11	諸厄利亜語林大成	本木正栄・樫林高美・吉雄永保・馬場貞歴・末永祥守	長崎
1816	文化13	道布法爾馬	ゾーフ(H. Doeff)・長崎通詞	長崎。通称「長崎ハルマ」。1811-
1854	嘉永7	エゲレス語辞書和解	西吉十郎・西吉兵衛・森山栄之助他	長崎。Bの途中で未完。1851-
1858	安政5	和蘭字彙	桂川甫周	江戸・山城屋佐兵衛刊
1860	万延1	増訂 華英通語	何紫庭原著・福澤諭吉訓点	快堂蔵版
1862	文久2	英和对訳袖珍辞書	堀達之助	洋書調所
1866	慶応2	改正増補 英和对訳袖珍辞書	堀達之助・堀越亀之助改訂	再版、開成所
1867	慶応3	和英語林集成	ヘボン(J. C. Hepburn)	横浜、上海・美華書院
1868	慶応4	英文熟語集	小幡篤次郎・小幡甚三郎	尚古堂

また、『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』に掲載される資料においては、1841年刊行の文法書『英文鑑』をはじめとして、1857年刊行の単語集である『英語箋(一名米語箋)』のように、「英」の文字が『諸厄利亜語林大成』刊行後に辞書の分野以外にも見られる。

なぜ、「諸厄利亜」という語が使われなくなったのだろうか。その最大の理由は、『諸厄利亜興学小筈』ならびに『諸厄利亜語林大成』が、刊行されず、写本のままで幕府の内部資料としてのみしか伝わらなかったことにあるのではないだろうか。前引南出論考に大槻文彦の引用がされながら、以下のように書かれている。

『語林大成』は禁制の書として幕府に秘蔵され公開されることは決してなかったのである。また、この辞書を用いて英書を訳すという必要も生ぜず「自ら深秘のものとなりて後には其書ある事をだに知れる者もなくなりし」（大槻文彦（1888））運命にあった。（132 頁。なお、大槻同書の実見は努力したができなかった。）

この 2 著は、2 節『諸厄利亚興学小筌』成立の背景で述べたように、フェートン号事件以後に鎖国体制の維持や国防のために作られた。そのうえ、補訂が行なわれていない。これらの本は、一般には公開されていなかったため、大槻が述べているように、「諸厄利亚」という語があることを知っていた人が少なかったのではあるまいか。それに対し、『諸厄利亚興学小筌』や『諸厄利亚語林大成』以後の本は、刊本であり、一般の人が手にとることができたものであるから、そこに書かれている「英」の文字が受容されやすかったのであろう。なお、「英」は England の語頭の発音 [ɪŋ] に近似する中国語音 ying（拼音）という発音の多数の漢字の内から選ばれたのである。因みに、中国語では America の Ame の発音に近い mei という発音の漢字の内から「美」が選ばれ、「美国」と訳されている。日本では mei を bei に充てて「米」字が選ばれ、「米国」と訳されている。

4 『諸厄利亚興学小筌』の内容について

『諸厄利亚興学小筌』の序文にもどる。そこには、この辞書の編纂方法が書かれている。それによると、「諸厄利亚」語を学ぶには、まずは、単語に通じ、その後、日常談話、書物の文章、と勉強を進めるのがよい、としている。そのため、『諸厄利亚興学小筌』は、全部で 10 巻で完結しているが、そのうち、3 巻までが「類語大凡」、4 巻と 5 巻とが「平用成語」、6 巻から 10 巻までが「学語集成」という構成になっている。

「平用成語」と「学語集成」とは、日常会話から書物の文章が読めるように段階的に構成されている。これらは底本からの翻訳であろう。しかし、単語を集めた「類語大凡」は底本になく、序文に「書（底本）中、解し易き類語を抄出し、傍に音訳の仮名を加へ、毎語訳字を附す」とあるように、本木の工夫であることが分かった。

それでは、この「類語大凡」は、単語集として、どういう意味をもつのであろうか。

今日の常識からすれば、単語集は、当然、アルファベット順が妥当である。現に、『英和对訳袖珍辞書』がそうであり、本木自身が『諸厄利亚興学小筌』完成 3 年後に著した『諸厄利亚語林大成』もそうである。しかし、『諸厄利亚興学小筌』はアルファベット順ではなくて、分類した語彙集なのである。これを前引井田は「部門別意義分類によって語彙を配列するやり方は百科事典的性格を帯びる辞書作りの手順」とし、「類語」を vocabulary と訳す。また、日本の源順『倭名類聚鈔』（931-938）・森島中良の『類聚紅

毛語箋』(寛政10年・西暦1798年)というオランダ語を集録した例を挙げ、中国(例は挙げていない)、日本に限られた方法ではなく、中世ヨーロッパ10世紀末のアルフリック『羅英類語集』の例を挙げ、ヨーロッパでも一般的であったという。しかし、そうなのであろうか。

本本の言う「類語」とは、vocabulary という意味でもなく、また「類似した単語」という意味の「類語」ではなくて、「分類した語」という意味の「類語」なのである。

では、そうした「分類した語」という編集方針とは、何なのであろうか。本本は、篇目において類語大凡の内容を「乾坤 時候 数量之部」と説明しているが、「類語大凡」全3巻における単語は、下位分類項目のタイトルなしに、ただ並べられているだけなので、私なりに、どのような分類となっているかを再構成して以下に示す。それを表中の「細分類」の項目とし、私が区分して命名した。以下、「類語大凡」の本文の一部ならびに、分類を示す。なお、単語の具体例は1巻(総数411語)のみ示し、紙幅上、2巻ならびに3巻は、細分類までを示す。

「類語大凡」の本文

^{ヘーベン} Heaven	天	^{パープル} purple	紫
^{マウンテン} mountain	山	^{リバー} River	川
^{シー} sea	海	^{コンチネンツ} Continent	陸 大陸 陸地

「類語大凡」の分類表

本本の分類	細分類	例語 ¹⁾	発音 ²⁾	訳語 ³⁾
乾坤	天	Heaven	ヘーベン	天
		World	ウオルト	宇宙
	方角	East	イースト	東
		South-East	ソウス イースト	巽 南東
	空	air	エール	大虚
		fair weather	ヘール ウエッドル	天朗
	太陽	the Sun-riSing	デ シュン レイシン	日出
		Sun shine	シュン セイン	日光

¹⁾ 大文字ならびに小文字は本文のとおり写している。

²⁾ 本文においては発音のみ朱色で書かれている。

³⁾ 割注は、小字の部分である。また、()の中のものは訳語につけられた仮名を示す。また、漢文での割注の場合は、読み下し文を示す。

乾坤	月	moon light	ムーン レイト	月明
		first quarter	ヒルスト クワルトル	上弦
	色	light	レイト	明(ヒナタ)
		blue	ブリュー	青
		heaven blue	ヘーヘン ブリュー	碧
	山川	continent	コンティネント	陸 陸地を以て相い接続する者
		land	レント	国
		Earth	エールス	土
	天候	Thunder	テユンドル	雷
		Snow-ball	スノウ ポール	霰珠(アラレ) 雪塊
	海	ocean	ヲシン	大洋
		Whirlpool	ウィルル プール	鳴渡(ナルト) 渦旋(ウツマツ)
	山	hill	ヒル	岳(ヲカ)
		vallei	ウエリィ	谷
	林	field	ヒールト	原野(ノバラ)
		bush	ビュス	竹林
		park	ペルク	牧(マキ)
	鉱物	minerals	メネレルス	諸金
		metal	メテル	青銅
		diamond	ダイヤモンド	金剛石(ギャマンセキ)
	火	fire stone	ハイル ストーン	火石(カトイシ)
		fewel	ヘウル	火材 万物の焚焼す可き物の惣称
	区域	The border	デ ボルドル	国界 界牌(サカイボウクイ)の同称
		academy	アカデミ	学校(ガクモンショ)
	建物	oven	ヲフン	土室(ムロ)
		wardrobe	ウエルドローブ	衣房
	墓	Tomb	トンブ	墓所(ハカバ)
		devil	デフル	夜叉(オニ)
	国	America	エメリケ	亜墨利加(アメリカ)
		England	エンキレント	諸厄利亜(アンゲリヤ)
時候	季節	The Season	デ セーソン	氣候
	一日	Day	デイ	日
		a mornings	エ モルニンキ	朝
	一年	This year	テイス エール	今年
		Every year	エウエリ エール	毎年
	一月	monthly	モーンテイリ	月々
		January	ヤンユウエリ	正月
	一週	Today	トデイ	今日
		the day before	デ デイ ベホール	前一日
		Sunday	シュンデイ	日曜日
数量	数字	CCC Three hundred	テイリ ヒユンドルト	三百
	序数	the hundredth	デ ホンドルツ	百番
	回数	five-times	ハイフ タイムス	五度
	倍数	double	ダブル	二重
		four times as much	フール タイムス ア ス モツ	四倍

第2巻（総数 868 語）では、官位人倫人事（皇帝・王族・王制・軍隊・戦・個人の外観・住民・職業・道楽・犯罪・身体障害・金融・学問・家族）、支體（身体の部分・五感・病状・薬）、気形（家畜・大型動物・小動物・製品・爬虫類・昆虫・魚・鳥）となっている。

第3巻（総数 890 語）では、器材（書き物に関する道具・身づくろいに関する道具・家具・火のまわりの道具・寝具・食器・調理道具・裁縫道具・布地・材木・大工道具・農具・漁業道具・埋葬・馬車・武器・船・時・挨拶・遊戯）、服食（外着・帽子・アクセサリ・小物・靴・食材・味覚・食事・パン・菓子・肉料理・卵・乳製品・調味料・酒）、生植（樹木・木の部分・種・穀物・野菜・植物）、言辞（大きさ・場所・往来・物の形状・強度・五感・量・形・状態・心のもち方・知・愛・恐・快・疑・憎悪・誉・偽・不快・場所・学習・言語）となっている。なお、名詞だけではなく、動詞や形容詞が多く含まれている。

この本の項目の排列のように、天文から始まって最後は言葉について書かれているこのような分類の方法は、実は、中国ならびに日本において近代の辞書ができるまで「類書」というジャンルで存在していたものの方法と同一である。すなわち、類書は辞書・百科事典というよりも、世界を記述し表現しているのである。大きくは三才（天・地・人）の世界を置き、天・地・人それぞれの中身を分類していくのである。すなわち、分〈類〉した〈書〉が「類書」である。「類語大凡」の例で見ると、第1巻が、天ならびに地について、第2巻ならびに3巻においては、人の世界を表現している。

『中国類書目録初稿』によれば、中国歴代の類書とその目録が記されている。歴史的に日本の奈良・平安時代に並行して言えば、唐代の欧陽詢等『芸文類聚』（げいもんるいじゅう）や徐堅等『初学記』が著名である。紙幅上、『初学記』の分類の全項目を示す。

巻1－2	天部	巻13－14	体部	巻24	居處部
巻3－4	歳時部	巻15－16	楽部	巻25	器用部
巻5－7	地部	巻17－19	人部	巻26	服食部
巻8	州郡部	巻20	政理部	巻27	宝器部(花草附)
巻9	帝王部	巻21	文部	巻28	果木部
巻10	中宮部	巻22	武部	巻29	獣部
巻11－12	職官部	巻23	道釋部	巻30	鳥部(鱗介蟲附)

また、類書は絵入りでも作られている。その代表は、明代の王圻等『三才図会』であり、その分類大項目は下記のとおりである。

天文4巻、地理16巻、人物14巻、時令4巻、宮室4巻、器用12巻、身體7巻、衣服3巻、人事10巻、儀制8巻、珍宝2巻、文史4巻、鳥獸6巻、草木12巻。

この『三才図会』に基づき、日本における分類をも併せて作られた類書が寺嶋良安の

『和漢三才図会』（正徳2年・西暦1712年）である。内容は、典型的な類書の構成をとっており、巻1から6までが「天」、巻7から54までが「人」、巻55以下を「地」と大きく分けて、さらに、それぞれその下に細かな項目が挙げられている。この細分類項目は多量であり、すべてを紹介することはできないので、天部のところのみの項目を示す。「天文、天象、時候、暦占、暦日吉凶」。

この『和漢三才図会』は江戸時代において、よく使われていた。江戸時代の知識人は『和漢三才図会』を含めて、類書をよく利用していた。その流れは近代になっても続き、たとえば、日本史・国文学研究者における検索文献の『古事類苑』（吉川弘文館）となって刊行され現在も生きている。当然、幕末の知識人たちも類書を利用していたと言える。和蘭通詞の本木もそうであっただろう。そこで、類書の方法に従って「類語大凡」を作ったのであろうと推定する。

前引井田は、柴野栗山『雑字類編』や『諸厄利亜興学小笈』の12部門に最も近いものとして榎島昭武『和漢音釈書言字考節用集』（享保2年・西暦1717年）を指摘している。おそらく井田は「類書」というジャンルが古くから存在していたことを知らなかったようである。『倭名類聚鈔』以下、井田の引用書はすべて「類書」なのである。なお、『諸厄利亜興学小笈』成立43年後に、村上義茂（英俊）著『三語便覧』（西暦1854年・達理堂蔵版・日本語の仏・英・蘭語対訳の書）が刊行されたが、その構成は次に示すように類書の形式をとっており、当時の伝統的な学習方法を示している。

初巻 天文・地理・身体・疾病・家倫・官職・人品・宮室・飲食・衣服・器用

中巻 兵語・時令・神仏・徳不徳・禽獸・魚虫・草木・果実・金石・医薬・采色・数量・地名

終巻 言語（陪名詞・附詞・前置詞・附合詞・動詞（語））

本木は、この「類語大凡」を通じて単語を覚え、それから順を追って文に至ることを期待しているため、辞書史研究者は「類語大凡」を単語集のように扱っているが、厳密に言えば、単なる単語集ではない。前引の諸類書項目が示すように、この分類は、実は、世界に対する理解を示す世界観であり、文化観なのである。本木は、単語を選抜して、世界の状態を分類して項目化していた。類書の項目は多種多様であるが、天・地・人という三才の枠組みは共通である。本木は、その共通枠を守っている。本木は底本の中から選んだ単語を類書の方法に基づき分類して並べ、世界を英単語によって構成し表現したと言えよう。彼なりに表現した世界は、本木独自のものではないかもしれないが、日本人の単語学習を、慣れないアルファベット順ではなくて、知識学習の定型である類書をモデルにしたことは、外国語学習を容易にさせようとする本木のすぐれた見識であると言えよう。かつ、この「類語大凡」によって単語を学習し、それから文の読解に入る

という、英語学習のすぐれた入門書となっているのであり、幕命によく応えたと言える。

なお、「類語大凡」の最後は、「言辞」であるが、前引『中国類書目録初稿』によれば、明・凌迪知『太史華句』にはじまり、清・王恒振『碎金海録』などが、すでに、その形式をとっており、「言辞」を最後に置く構成は、本本の独創的配置ではない。

また、この類書形式が上引『三語便覧』以後、ほとんど姿を消してしまった大きな理由は、語学学習の発想が次のような理由で変化したからであろう。すなわち、類書形式は、ことばを関連する部類ごとに興味をもって学習するのに適しているのに対し、明治以後では、文章中のことばの意味の検索のための辞書、すなわちアルファベット順で機械的に検索しやすいものが尊ばれ求められたためである。

5 おわりに

本稿において、『諸厄利亜興学小筈』の構成における「類語大凡」は、ただ単なる単語集ではなく、一個人とはいえ、本本が世界を英単語で表現し、それなりの世界観を示す資料でもあることを述べてきた。これは、当時の日本人の異言語学習をとおしての異文化理解の一方法を示している。しかし、同書の具体的な訳語の訳出方法は、検討し始めたばかりで、まだ十分には検討はしていない。他方、私は前引拙稿において、日本の最初の英和辞書である、『英和对訳袖珍辞書』の訳語の訳出方法を検討し、まだ見たことの無い物の説明方法に、いくつかのパターンがあることを示した。

現在のところ、両書の訳語の比較を始めたところであるが、その資料の一端を下に示す。なお、便宜上、英単語はアルファベット順に並べている。両書の訳語の訳出方法の比較を通して、日本人がもつ単語をとおしての異文化理解の方法をより明確にすることができると考えている。

	『諸厄利亜興学小筈』	『英和对訳袖珍辞書』
astronomy	星動学 天文	星学
barber	剃剪(ヒゲソリ)	髭剃ル人
border	国界牌(サカイボウクイ)の同称	縁、端、境界
brewer	酒匠(サカヤ)	醸ス人
butler	行酒人(サケツギ)	食物ヲ預カル役人、給仕スル人
college	大学(ガクモンショ)	会合所社中、学校
debt	借財	負ヒ 借金等ノ
geometry	町間術 地理	測量術
hall	賓堂(ザシキ)	家ノ寄り付き、客殿、住居、城市中ノ役所、大学校ノ寄合
liberal art	七芸の総称 和漢六芸の如きもの 西洋の天文、地理、言語、論理、詩文、吟歌、算学を以て七芸とす	七芸 性理学、文学、詩学、言学、度学、画術、彫物学 * (項目は liberal arts となっている。)
path	径(コミチ)	路、道
printer	刷印工(ハンスリ)	板ヲ摺ル人

school master	塾師(テラコヤ)	儒官
study	書屋	学問部屋、学問
wardrobe	衣房	衣服ヲ入レル戸棚

引用文献

- 1 新井白石著・村岡典嗣校訂(1936)『西洋紀聞』岩波文庫
- 2 井田好治(1982)「長崎本「諸厄利亜興学小筈」の考察」(『「諸厄利亜興学小筈」「諸厄利亜語林大成」研究と解説』日本英学史料刊行会編 大修館 pp.7-38)
- 3 伊藤朱(2004)「外国辞書の訳出における異文化接触—『英和对訳袖珍辞書』を通して」
大阪大学大学院言語文化研究科修士論文
- 4 岩崎克己(1941)「徳川時代における英語辞書の舶載」(『書物展望』11巻3号 臨川書店 pp.2-13)
- 5 大阪女子大学附属図書館(1991)『大阪女子大学蔵 蘭学英语資料選』
- 6 大槻文彦(1888)『復軒雜纂』広文堂書店
- 7 鄧嗣禹編(1970)『中国類書目録初稿』台湾古亭書屋
- 8 早川勇(1998)『日本英語辞書年表(終戦まで)』(岡崎学園国際短期大学 人間環境研究所)
- 9 南出康世など(2000)「大阪女子大学蔵 洋学資料総目録」大阪女子大学
- 10 南出康世(1991)「第II部英学史料 各説 第3章 辞書・第4章 文法書」(『大阪女子大学蔵 蘭学英语資料選』大阪女子大学 pp.126-156、pp.157-173)
- 11 渡辺実(1982)「英語習学の方法と論理—「諸厄利亜語林大成」の誕生まで」(『「諸厄利亜興学小筈」「諸厄利亜語林大成」研究と解説』日本英学史料刊行会編 大修館 pp.81-111)